第3回関西支部研修会

「チェアーサイドにおける咬合調整法の実際と迷わず安心できる咬合調整法」

講師：楠本　哲次（大阪歯科大学講師）
日時：平成22年11月14日(日)
場所：大阪・梅田スカイビル

田中　栄次（京都府）

平成22年11月14日（日）巨大クリスマスツリーの準備が着々と進んでいる、梅田スカイビルにおいて、第3回関西支部研修会が開催されました。

『チェアーサイドにおける咬合調整法の実際と迷わず安心できる咬合調整法』と題して、大阪歯科大学有歯補綴咬合学講座の講師でいらっしゃる楠本哲次先生にご講演頂きました。楠本先生は、日本インプラント学会専門医をはじめとして数々の資格をお持ちであり、当会のご講演は2回目で講演途中でも随時質問を受けて下さる旨お話があり、講演開始より多くの質疑応答が行われました。

実際、チェアーサイドで行っている咬合接触記録法においては、まず印記される側（天然歯や補綴歯）と印記する材料（咬合紙等）に大別できる。

印記される側としては、補綴物の材料、表面性状、唾液の粘度、口腔内の温度や湿度によって印記具合が変化します。さらに、印記する材料、咬合紙は数十μmの厚みがある為に実際に咬合紙によって印記されていたとしても、厳密には噛んでいない事が非常に多いという驚愕の事実を指摘されました。

厳密な咬合接触がない歯列においては必ず接触面積比率の高い歯牙が出現し、特定部位に、長期的にそのような過酷な負担荷重が強いられた場合の予後は容易に類推できる。コンタクトしている位置や面積を確認する事ができる方法としてシリコーンブラック検査法があります。

また、インプラント、天然歯、デンチャーが同一歯列内に並存した時に被圧変位量の違いからどのような咬合接触を付与するべきなのか、

インプラントの咬合接触を与える時、頬舌的にどの位置にどれだけのコンタクトポイントを与えるのが良いのかなど、咬合付与についての問題点を抽出し様々な角度から検討致しました。確定的な解答は存在しないもののガイドとなる指標を与えて頂きました。

午後は、実習を中心に行いました。時間の兼ね合いで、シリコーンブラック検査のみ相互実習となりました。

強く噛み締めた時と弱く接触した時のGC社のバイトチェッカーの抜け具合を比較する事により、早期接触や実際に咬合している部位や範囲、咬合異常を見定める事ができ、簡単で優れた評価法であることを認識できた。

咬合に関しては厳密には非常に難しく、曖昧になっている所もありますが、日々必ず携わるものであり、今回の研修会により、より整理する事ができました。

たくさんの質問が飛び交い、予定された資料の1/3しか講演は進みませんでしたが、盛会に終了致しました。